二

二人は酒を注ぎ合い、再会を祝した。

「坂崎、気がかりから伝えよう。そなたの父上のことじゃ。屋敷は思った以上に警戒が厳しくて夜も忍び込めぬ。文六様は白石様を暗殺した今、正睦様を一気に切腹まで追い込む考えのようでな、それも近々命が下るという、城中のもっぱらの噂じゃ」

「実高様のお許しも得ずにですか」

「参勤で江戸に出られたこの一年を利して、完全に国許を宍戸派で固めるつもりだ」

「なぜそのように強引な手を打たれるのでこざいますか」

「文六様は妄想に駆けられておられる。おのれがなくなれば宍戸一族も消滅するというな」

「…………」

「文六様は、嫡男秀晃様に家督と国家老の地位を譲って、あの世に行きたい一念に燃えておられるのだ」

宍戸秀晃は幼少の折りから体が弱く、文六ら家族を悩ましてきた。城に見習い小姓として出るようになったのは二十歳過ぎのことだ。

言動も覚束ない秀晃を心配した文六は、秀晃の周辺に朋輩衆と称する家臣や陪臣を集めて固めた。

関前藩の中興の祖として功績のあった文六の、一人息子の虚弱を藩主の実高様も気にかけられたことが藩士たちにも伝わり、秀晃は三十五の年まで父から自立することなく、我儘放題に育ってきた。病弱を理由に江戸藩邸勤番をも務めたことのない秀晃はその分、国許を宍戸派で固めてきたということになる。

「ご家老にお会いになられましたか」

「会わずに済まされぬわ。朝早くから出仕し、夜も遅くまで回りに宍戸派を侍らしてあれやこれやと指示を出しておるゆえ、顔を合わさぬでは済まぬ。屋敷に戻っても同じことらしい。それにしても驚いたぞ、三年ぶりに会った文六様の老いにな」

磐音は、そこまで宍戸文六の老いが進んだこと、そして、そのような老人に藩政を委ねている豊後関前藩六万石の悲劇と危機に愕然とした。

「それがしは文六様に呼び出され、なぜ、火急に帰国いたしたかと、詰問された、小細工しても済まされぬと思うたでな、実高様の命により、昨夏の小林琴平、河出慎之輔の事件の洗い直しに帰国したと答えておいた」

「また大胆な返答をなさいましたな」

「何を申しても文六様は疑ってかかられるわ。ならば、最初から相手に警戒を抱かせるくらいの緊張があったほうが、そう度々ご家老の顔を見ずに済むでな」

と苦笑いした半蔵は、

「ただ、城中の行き帰りに文六の家来が金魚のふんのように尾行する。その都度、撒くのにひと工夫せねばならぬ。今宵も、妻の実家に立ち寄ったふりをして、裏口から抜け出てきたのだ」

「それはご苦労にございましたな」

「坂崎、そなたの父上を文六様が標的になされたは、藩の実務に、特に財政に精通しておられるゆえ、もっとも恐れたからであろう。そなたが江戸で探り出した一万六千五百両の不正借り入れも、文六様の指示がなければ絶対にできぬ相談だ。この関前にもその証拠が残っておるに違いない。もしかしたら、正睦様はご存じかもしれぬ。

「それで父上は不正の疑いをかけられ、蟄居の上に切腹を命じられようとしているのですか」

「盗人猛々しいとはまさにこのことじゃ。不正の総本山が、清廉潔白な正睦様を反対に始末しようと策を弄しているのだからな」

「…………」

「そなたの父上を救うことは藩を救うことと、国表に戻って改めて気付かされたわ」

「父の疑いを解く策がございますか」

「そこだ」

半蔵は喉の渇きを潤すように、杯に残っていた酒を舐めた。

「それがしは文六様に面と向かって、坂崎正睦様の蟄居閉門の理由を問い質した。家老を始め藩の重役の行動を監督糾弾するのが御直目付の職務だからな」

「ご家老はなんと応えられましたか」

「坂崎正睦どのは藩財政の改革と称して、藩の物品を藩物産所に独占せんとして、干し海鼠など海産物を買い上げた。その折り、物産を集荷する出入り商人の一人、西国屋次太夫 から賂を受け取りし疑いこれありとぬかしおったわ」

「中居様、父の藩物産所創設には御用商人の介在を省くという方策をとりましてございます。それだけに当初反発も大きゅうございました。それが、御用商人と結託するなどありようもございませぬ。まして、他国から関前に参った西国屋はいろいろと噂がある商人ではありませぬか」

廻船問屋西国屋次太夫は、今から二十年も前に関前に辿り着いて宍戸文六の庇護のもとに大きくなった商人だ。正睦が一番毛嫌いしていた城下の商人といえた。

「だから、盗人猛々しいと申しておるのじゃ、磐音。西国屋が文六様と親しいのは周知の事実。一連の騒ぎの背後にはすべて西国屋次太夫が控えておると推測してきた。宍戸派はこの際、なりふりかまわず強引にも正睦様を死に追い込もうとしておるのだ」

「西国屋次太夫は、城下におりますか」

「文六じじいめ、用心深い。正睦様に蟄居閉門の沙汰を下した同時に、西国屋次太夫をどこぞ隠しおった」

「探す道はなんぞありませぬか」

「なくもない。手は打ってある」

と答えた半蔵は、

「西国屋は長崎に出店を持ち、異国との交易にも手を出しておる。一昨日、西国屋の留守を預かる番頭の一人、清蔵が供を連れて長崎に発った。それがしはすぐに追っ手を出して、国境を越えたところで捕縛せようと命じた」

「相手が相手じゃ、時間もないでな、仕方あるまい」

「清蔵になんとしても次太夫の隠れ場所を吐かせる。次太夫の身柄を確保できれば、正睦様のお命は助かる」

磐音は頭を下げて、礼を述べた。

「これは坂崎家の私闘ではない。豊後関前藩六万石の存亡に関わる大事だ。それがしはどんな手でも使うぞ」

中居半蔵は改めて宣告した。

「承知しました。中居様、なんなりと命じてください」

「清蔵捕縛の報が届けば、そなたにも連絡する」

「はっ」

と磐音は畏まった。

「今ひとつ、そなたには厳しい話がある」

「なんでございましょう」

「小林琴平の妹、奈緒どのが関前を出られた」

「引越しにございますか」

「そうではない」

中居半蔵は言い淀んだ。

「昨夏の事件以来、元納戸頭小林助成様の中気が進行し、また倒れられた。琴平、舞どのと二人の子が不慮の死に見舞われたのだ。当然といえば、当然のことだ。小林家の廃絶は過酷なものでな。屋敷を出されたほかに奉行人は解かれ、蓄財も藩に没収されたそうな。この沙汰に必死で抵抗なされたのがそなたの父上のほか、数人という。ここでも宍戸派の横暴極まりだ。ともかく小林家は窮乏に追い込まれた……」

「奈緒どのはどこぞに奉行人に出られましたか」

「磐音、驚くなよ。時折り関前城下に回ってくる女衒に身売りなされたようじゃ」

磐音は瞑目した。

（関前に戻るのが、一足遅かったか）

磐音の手が膝の上でぶるぶると震えた。

（琴平、慎之輔、舞どの、助けてくれ）

心のうちで念じた。

「坂崎、心して聞け。奈緒どのの悲劇ももとを糺せば、宍戸文六に行きつく。関前滞在の間に不正の確かな証拠を手に入れて、一気に瓦解に追い込むぞ。それまで、磐音、奈緒どののことは忘れよ」

中居半蔵は過酷な命を磐音に与えた。

その夜、磐音は悶々として眠れなかった。

物心ついたときから、

「磐音と奈緒は夫婦になる」

と周囲からもそう言い聞かされ、自分たちもそう信じて生きてきたのだ。

（なんという試練を神は与えられるか）

奈緒の白い顔が磐音の頭裏に浮かび、助けを呼ぶ声がいつまでも消えることはなかった。

明け方、とろとろとまどろんだ。

どこかで磐音を呼ぶ声がした。

それが夢か現か、しばらく磐音は区別がつかなかった。

「坂崎様」

今度ははっきりと聞こえた。

早足の仁助の声だ。

磐音は飛び起きた。

離れ座敷の廊下に仁助が控えていた。外はまだ薄暗いようだ。

「すまぬ、うっかりと寝込んでしまった」

「坂崎様を連れして参れとの中居様の伝言にございます」

「よし、すぐに仕度する」

磐音は手早く身仕度を整えると庫裏に行き、すでに経を唱えながら味噌を擂る和尚の願龍に外出を断った。

「磐音様、一々のお断りは無用です」

和尚は磐音や中居半蔵の使命を推測で理解したようだ。

頷いた磐音は庫裏から仁助が待つ山門に廻った。

仁助が案内していったのは、臼杵との国境にある、小さな漁村大泊だ。

二人が漁村に到着したとき、朝は明け切っていた。大泊の外れに小さな岩場の岬、天神鼻が突き出し、その中腹に船魂を祀る神社があった。

人影もない神社の横手に離れて建つ納屋から人の気配がした。

「中居様」

仁助が密やかに声をかけた。すると納屋の戸が開いて、額に汗を浮かべた半蔵が顔を出した。

「坂崎か、ちょうど良いところに来た。まずは入れ」

納屋に入ると、薄暗い土間に二人の町人が縄で縛られ、一人は柱に縛り付けられていた。髪も衣服も乱れているところを見ると、それまで厳しく問いつめられていたのだろう。

責め手の一人は、中戸信継道場の同門、若い藩士の別府伝之丈だ。

磐音と伝之丈は黙って挨拶を交わした。

「西国屋の番頭の清蔵と手代だ」

半蔵が磐音に言うと、

「清蔵、もう一度、西国屋次太夫の行き先を申せ」

「ゆ、由布院の湯にございます」

清蔵が諦め切った顔で呟くように言った。

「旅籠はなんという名か」

「湯元屋にございます」

清蔵はそう言うと、磐音の顔を見てはっとした。

「それがしの顔を知っているようだな」

「坂崎磐音様……」

「父は閉門中の正睦じゃ」

清蔵ががくがくと頷いた。

顎で清蔵らを指した半蔵が、

「この者たち、長崎に出る途中に由布院に立ち寄る予定であったらしいわ。宍戸文六様が次太夫に宛てた手紙を持参しておった」

半蔵は懐から手紙を出すと、磐音に渡した。

磐音は戸口の前に行き、細く開けられた戸から差し込む光で手紙を読んだ。

＜西国屋次太夫に急ぎ認め申す。江戸より御直目付の中居半蔵が到着致し、昨夏の事件を蒸し返して調べるとの申し出あり。殿の命とあらば拒むわけにもいかず。今のところ好きにさせておる次第。ともあれ、坂崎正睦の処断を急ぎ、完全に改革派の息の根を止める決意致し候。そこで西国屋、そなたの由布院滞在も当初の予定より長くなるやもしれず、そのこと知らせ参らせ候。昨年の事件では、そなたがご番組頭山尻三郎助次男、頼禎を唆し、河出舞の不義話を撞木町界隈に流した経緯もあり、ここはしばらく辛抱かと考え、命の洗濯なんぞを山の湯で続けられたし＞

磐音は手紙を二度三度と読み返し、改めて上野伊織の推測があたっていたことに思い至った。

「中居様、西国屋次太夫の身柄、それがしにお任せくだされ」

「そうしてくれるか。こちらは、こやつどもをどこぞに幽閉しておかねばならぬゆえ、人手が割けぬのじゃ。早足の仁助をつけよう」

「十分にございます」

頷いた半蔵が、念のためじゃと清蔵に、

「次太夫は何人で滞在しておるな」

と訊いた。

「妾のお糸様に小女と下男……」

「三人だけか、ほかにおらぬか」

清蔵はしばらく沈黙した後に、

「美濃部大監物様のお仲間、姫村理三郎様ら五人が従っておられます」

「こやつ、まだ隠していることがあるぞ」

と中居半蔵は言うと、

「坂崎、たれぞつけるか」

と訊いた。

「差し当たって仁助と二人で十分にございます。次太夫を城下に移送する際に手が要るかと思います」

「よし、そなたらからの連絡を受け次第、人手を由布院に送る」

磐音は半蔵に畏まると、仁助に出立の合図をした。

磐音と仁助は、臼杵城下を抜けた街道から山道に入った。旅慣れた二人でも山道はそうそうはかどらなかった。

阿蘇野川の流れのそばの旅籠に泊まり、翌早朝からさらに大分川の流れに沿って由布院を目指した。

由布院の湯は「豊後国風土記」によれば、この地に生育する栲で木綿を作っていたことに由来し、奈良時代には穀物などを貯蔵する院、つまり倉が置かれていたことから、名がついたという。

由布岳の麓から湧き出す湯は豊かで、昔から湯治客に愛されてきた山里の湯だ。

磐音と仁助の二人が、雨乞い岳、花牟礼山の谷間を抜けて、湯平、渡司、馬渡、網代、津々良を経由して由布院の湯煙を眺めたのは、大泊を出た二日目の夕暮れであった。

高台から眺める由布院は、夕霧がたなびいてなんとも幻想の里であった。

「どこぞに宿を求めようか」

さすがの仁助も由布院の里は始めてだという。

大分川に沿った里道を下がっていくと、少年が流れで馬を洗っていた。

夕暮れの刻、里は茜色に染まり、河原に無数の蜻蛉が飛び交っていた。番いながら飛んで行く蜻蛉もいた。

「ちょいと訊いて参りましょうか」

仁助が身軽に河原に下りると、旅籠のありかを訊きに行った。

磐音は水の瀬音以外、物音ひとつしない里に江戸の喧騒を重ね合わせて思い出していた。

仁助は少年と長いこと話し込んでいた。最後には小銭でも渡したふうで苦笑いしながら戻ってきた。

「坂崎様、お待たせしました」

その肩に秋茜と呼ばれる赤蜻蛉が止まっている。

「なんぞ収獲があったようだが」

「なにしろ小さな村です。一行の滞在は評判になっているようです」

そう言った早足の仁助は、

「由布院一の湯治宿は、西国屋次太夫一行が留まる岳本の池のそばの湯元屋だそうにございます。そのほか池の周りに、客を泊める旅籠が四つ五つ、湯治客を泊める百姓家が数十軒あるそうです。なにしろ湯口だけで何百とあると申します。湯元屋とは池をはさんだ対岸の湯治宿、豊後屋が客あしらいがよいと申しますので、そこに参りましょうか」

少年に手を振った仁助は、さらに流れに沿って下り始めた。

「西国屋の一行は由布院でも評判を呼んでおりましてな、なにしろ妾のお糸に用心棒の浪人連れです。なんぞいわくがあるのではと、村では言い合っていると申します」

「湯治客とは一風変わっているからな」

「それに浪人たちがしばしば酒を飲んでは騒ぎを起こすとか。若い娘は湯元屋には近づけるなと、名主の命が出ておるそうにございます」

「酔って女子衆にいたずらを仕掛けておるのだな」

「そんなところでしょうな。それでも、世の中は不思議なもので、宇佐から湯治に来ておる商家の女房と、浪人の頭分の姫村理三郎がねんごろになって、毎晩姫村は湯元屋から女房の泊まる百姓家に通っておるそうにございますよ」

「ほう、それはまたおもしろき知らせだな」

まずは姫村を捕縛して、次太夫たちの様子を訊き出してもいいかと考えながら、磐音が足を進めていると、

「この土橋にございましょう。まっすぐに行くと湯元屋のある由布院の名主屋敷前に出るそうにございます。あっしらはこの土橋を渡って、池の対岸に出ることになります」

仁助と磐音は、丸太を三本並べた上に土を載せた橋を渡り、さらに土手を三、四丁ほど下がった。すると、少しばかり小高い丘の上から白い湯煙が立ち昇り、平屋造り黒ずんだ湯治宿が見えてきた。

由布院の旅籠は岳本の池を囲むように散在していた。池は湖底から温泉が湧き出る不思議な池だ。

磐音が向こう岸を望むと二階建ての湯治宿が目に入った。

その横手には、豊後富士の異名を持つ由布岳が四千八百余尺の秀麗な姿を夕暮れの空に聳えさせていた。

仁助は旅籠の玄関に走り、女衆と話していたが、流れと山を眺める磐音に、

「うまい具合に一部屋空いておりました」

と知らせに来た。

豊後屋は、長屋のような湯治宿が三棟並び、それぞれ一棟に十二組が寝起きできるようになっていた。

「坂崎様、夕飯前にちょいと湯元屋を覗いて参ります。湯なんぞに浸かって待っててくだせえ」

「無理は禁物だぞ」

磐音の言葉に頷いた早足の仁助が姿を消した。

磐音は、川の流れに近い端っこの部屋の通された。板の間に夜具が積んであるだけの部屋である。

「名物の湯に入れてもらおうか」

磐音はまず岳本の池の共同湯の下ん湯を教えられ、旅籠から半丁と離れていない湯に向かった。